

和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第22~23章）

外 蘭 幸 一

まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第21巻2号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第21章）」に引き続くものである。「第19巻1号」（本シリーズ冒頭の号）所載の和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第1~3章）」の「まえがき」に記載したように、筆者は、すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが、もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして、これまでに第1章から第21章までを発表したので、今回はそれに続く形で、第22章と第23章を掲載する。なお、第22~27章は、拙著『ラリタヴィスタラの研究 下巻』の「第三部」に掲載したので、これらの章は『下巻』を底本とすることになる。

略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』（大正新脩大藏經 187）. Chinese Translation of the Lalitavistara.

普曜 = 『普曜經』（大正新脩大藏經 186）. A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.

『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辞典（増訂版）』（昭和32年増訂版，世界聖典刊行協会）

『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』（昭和53年，講談社）

『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年，東京書籍）

『上巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年，大東出版社）

『中巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 中巻』（2019年2月，大東出版社）

『下巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 下巻』（2019年10月，大東出版社）

BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.

BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」は、会話文を示すために用いる。
 2. () は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
 3. [] は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
 4. < > は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
 5. 《 》 は、東大主要写本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
 6. [] は、東大主要写本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
 7. 【 】 は、諸写本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。
- *なお、第22章から第27章までの訳文の左端に付してある数字（208~484）は、『下巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

キーワード：ラリタヴィスタラ，仏伝文学，大乘仏教，混淆梵語，仏教思想

『ラリタヴィスタラ』(大遊戯経)

第22章(成正覚品)¹

208 かくして、実に比丘らよ、菩薩は敵なるマーラ(悪魔)を打ち破り、棘²[なるもの]を抜徐し、戦闘の前線にて勝利を得て、傘蓋・旗幟・幢幡を掲げたり。[また]諸の愛欲を捨離し、諸の悪・不善の法より離れ、尋³(粗大なる表象作用)あり伺⁴(微細なる表象作用)ありて、遠離より生じたる〈喜・楽〉を有するところの初禪(四禪定⁵の第一段階)に達して[その境地に]住したり。[また]彼は尋と伺とを鎮め、内心を澄淨ならしめ、心[の所念]を一つに集中して、無尋・無伺にして、三昧より生じたる〈喜・楽〉を有するところの第二禪に達して[その境地に]住したり。[次に]《彼は⁶喜への欲を離れて、捨⁷(苦楽を離れた平靜なる心)に住しつつ、正念・正知にして⁸、身体に楽を感受せり。諸の聖賢が「それ、正念ありて、楽に止住する捨[の心境]なり」と説けるところの、喜を離れたる第三禪に達して[その境地に]住したり。[さらに]彼は楽を捨て、また、すでに苦をも捨てて、愉快と憂愁とを共に滅却し、不苦・不楽にして、捨も念も清淨なるところの、第四善に達して[その境地に]住したり。

それから菩薩は、かくの如く入定せるところの、極めて清淨にして甚だ純粹なる、明淨なりて煩惱なく、随煩惱⁹(小煩惱)をも離れたる、柔軟にして活潑澁地たる¹⁰、動揺することなき心をもって、初夜分¹¹(夜の最初の部分)において、天眼による¹²智見の明知を現証するために、心を発揚し傾注せしめたり。

210 その時、菩薩は、極めて清淨なる、人間をはるかに超出せる天眼を以て、諸の衆生を觀察し、諸衆生が、死に行き生まれ来たり、美しき容色あり[あるいは]醜き容色あり、幸運なる[あるいは]不運なる、劣等なる[あるいは]優秀なるものありて¹³、[各自の]業に従って転生するを了知したり。「さて、哀れなるかな。これらの[劣悪なる]衆生は、身体による悪行を具有し、言語と心意とによる悪行を具有し、諸の聖賢を誹謗せる、邪見の徒なり。彼らは邪見の業【法¹⁴】を受持せ

¹ 方広にも「成正覚品」と訳されている。

² 「棘」(kaṇṭhaka)は方広には「毒刺」と訳されている。

³ 「尋」(vitarka)とは「尋求」の義であり、「対象について概観する心の活動」「探究的な粗大な心のはたらき」をいう。

⁴ 「伺」(vicāra)とは「伺察」の義であり、「細かに事物を考察させる心のはたらき」「観察的な微細な心のはたらき」をいう。尋と伺とは対の概念であり「尋は対象を粗く考えることで、伺は対象を微細に考察することである」(『佛教語大辞典』797頁「尋伺」参照)。

⁵ 「四禪定」については、第20巻第1号所載の拙訳(註158)を参照されたい。

⁶ 「彼は」(sa)は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

⁷ 「捨」(upekṣaka)とは「楽でも苦でもなく、善くも悪くもないというように、物事に対するかたよりがなく、心が平等でぞわつかないこと」である。「一切のものに対する執着を捨てた平静なる境地」であるから「捨」という。

⁸ 「正念」と「正知」については、第19巻第4号所載の拙訳(註5)を参照されたい。

⁹ 「随煩惱」(upakleśa)とは「根本煩惱に随伴する第二次的煩惱」を指す。

¹⁰ 「活潑澁地たる」(karmanye-sthita)とは「禪者のはたらきが澁刺として活気に満ちているさまの形容」である(『佛教語大辞典』180頁参照)。

¹¹ 「初夜分」とは「夜を三分した最初の部分」であり、午後6-9時ごろに当たる。

¹² 「下巻」には「天眼により」と訳したが、「天眼による」に訂正する。

¹³ チベット訳には「劣等なる[あるいは]優秀なるものありて」に当たる訳文がない。

¹⁴ 「法」(dharma)は、T5以外の写本に挿入されているが、チベット訳には該当訳語が見当たらないので、削除すべきかもしれない。

るが故に、身体が滅して命終せる後に、悪趣・悪道に転落し、諸の地獄に生まれる。しかし、これらの尊敬すべき¹⁵ [他の] 衆生は、身体による善行を具有し、言語と心意とによる善行を具有し、諸の聖賢を誹謗することなき、正見の徒なり。彼らは正見の業【法¹⁶】を受持せるが故に、身体が滅したる後に、善趣なる光明世界の、諸の天界に生まれる¹⁷。

かくの如く、実に、[菩薩は] 極めて清浄なる、人間をはるかに超出せる天眼を以て、死に行き生まれ来たり、美しき容色あり [あるいは] 醜き容色あり、幸運なる [あるいは] 不運なる、劣等なる [あるいは] 優秀なるものありて、[各自の] 業に従って転生する、諸の衆生を観察したり。かくの如く、実に比丘らよ、菩薩は初夜分において明知を現証し、暗冥を滅し、光明を生ぜしめたり。

それから菩薩は、かくの如く入定せるところの、極めて清浄にして甚だ純粹なる、明浄なりて煩惱なく、随煩惱をも離れたる、柔軟にして活潑地たる、動揺することなき心をもって、中夜分¹⁸（夜の中間の部分）において、宿命（過去世の生存）を想起する智見の明知を現証するために、心を《発揚し¹⁹》傾注せしめたり。彼は自らの、また他の衆生の、種々なる宿命を想起したり。すなわち、一生を、また二 [生]、三 [生]、四 [生]、五 [生]、十 [生]、二十 [生]、三十 [生]、四十 [生]、五十 [生]²⁰、百生、千生²¹、百千（十万）生を、また無数の百千生を、また拘胝生を、また百拘胝生を、また千拘胝生を、《また百千拘胝生を、²²》また拘胝那由多生を、また無数の百拘胝生を、また《無数の千拘胝生を、²³》また無数の百千拘胝生を、また無数の百千拘胝那由多生を、乃至、壊劫（世界が破壊する時期）を、また成劫（世界が生成する時期）を、また壊劫と成劫とを、また無数の壊劫と成劫とを想起したり。「われは、かくかくなるところに住したり。名前はかくの如し、種姓²⁴はかくの如し、血統はかくの如し、階級（カースト）はかくの如し、食物はかくの如し、寿命はかくの如し、所住の期間はかくの如し、楽と苦との感受はかくの如し、われはそこより死没して、かくかくなるところに生まれたり。《[また] そこより死没して、かくかくなるところに生まれたり。²⁵》[さらに] そこより死没して、ここに生まれたり」と。相貌（姿形）を含め、[また] 方處²⁶も含めて、自らの、また一切衆生の、種々なる宿命を想起したり。

それから菩薩は、かくの如く入定せるところの、極めて清浄にして甚だ純粹なる、明浄なりて煩惱なく、随煩惱をも離れたる、柔軟にして活潑地たる、動揺することなき心をもって、後夜分²⁷

¹⁵ チベット訳には「尊敬すべき」(bhavantaḥ) に当たる訳語がない。

¹⁶ 「法」(dharma) は、T5, N3, H 以外の写本に挿入されているが、チベット訳には該当訳語が見当たらないので、削除すべきかもしれない。

¹⁷ チベット訳は「生まれる者たちなり、と了知したり」という意味の訳文になっている。

¹⁸ 「中夜分」とは「夜を三分した中間の部分」であり、午後9時～午前1時ごろに当たる。

¹⁹ 「発揚し」(abhinirharati sma) は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

²⁰ チベット訳には、「生」(jāti) に当たる訳語 (skye ba) がある。

²¹ 『下巻』には「百 [生]、千 [生]」と誤記したので、「百生、千生」に訂正する。

²² 《 》内の原文 (jātikotiśatasahasrāny api) は全写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²³ 《 》内の原文 (anekāny jātikotiśatasahasrāny) については、諸写本に混乱が見られ、東大主要写本には anekāny jātikoti の部分が欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²⁴ 「種姓」(gotra) とは「家族の姓 (氏族名)」を意味する。

²⁵ 《 》内の原文は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²⁶ 「方處」(uddeśa) とは「場所；地域；地方」の意である。

²⁷ 「後夜分」とは「夜を三分した最後の部分」であり、午前1～5時ごろに当たる。

214 (夜の最後の部分)の暁天明けそめるころ、[夜明けを告げる]鼓音の鳴る前に、苦と集起²⁸(苦の発生)とを消滅せしめ、漏尽²⁹の[煩惱を断じ尽くす]智見の明知を現証するために、心を《発揚し³⁰》傾注せしめたり。彼(菩薩)はかくの如く思念せり。「ああ、この世間は苦悩に陥りたり。すなわち、生まれて、《老い³¹》死に、消滅しては[再び]出現する。しかもなお、老・病・死をはじめとする、この、大なる苦蘊(苦の集積)にすぎざるものから脱出することを知らざるなり。まことに哀れなるかな、老・病・死をはじめとする、この、大なる苦蘊にすぎざるところの全てを終滅せしめる道(方法)が知られざるとは」[と]。

それから、菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに老・死はありや。また、老・死の縁(原因)は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「生があるときに老・死は生ずる。実に、老・死は生を縁とする」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに生はありや。しかしてまた、生の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「有³²(生存)があるときに生は生ずる。また、生は有を縁とする」[と]。

それから、菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに有はありや。しかしてまた、有の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「取³³(執着)があるときに有は生ずる。また、有は取を縁とする」[と]。

それから、菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに取はありや。しかしてまた、取の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「愛(渴愛)があるときに取は生ずる。また、取は愛を縁とする」[と]。

216 それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに愛はありや。しかしてまた、愛の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「受(感受)があるときに愛は生ずる。《また³⁴》愛は受を縁とする」[と]。

それから、さらにまた菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに受はありや。しかして【また³⁵】、受の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「触(対象との接触)があるときに受は生ずる。また、受は触を縁とする」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに触はありや。しかしてまた、触の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「六処³⁶(感覚と知覚の六機能)があるときに

²⁸「集起(samudaya)とは「諸縁が集まって起こること」であるが、特に「苦の発生」を意味する。

²⁹「漏」は「煩惱」の異名であり、「煩惱を断じ尽くすこと」を「漏尽」といい、「漏尽に至ったことを知る智」を「漏尽通(ろじんずう)」という。

³⁰「発揚し」(abhinirharati sma)は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

³¹「老い」(jiryate)は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

³²「有」(bhava)とは「生死輪廻が続いて因果が尽きることのない迷いの生存状態」であり、「欲界の生存(欲有)」「色界の生存(色有)」「無色界の生存(無色有)」という「三有」がある。

³³「取」(upādāna)とは「執着し、欲求してやまない心のはたらき」であり、「取著」とも訳される。取著は「執着の念。心の外においては対象を實とみなし、身においては我ありと執着し、我所すなわち、我のはたらきを執すること」と説明される(『佛教語大辞典』622頁参照)。

³⁴「また」(ca)は東大主要写本に欠けているが、文脈上、これを挿入すべきである。

³⁵「また」(ca)は写本T3には欠落しているが、他の写本にはある。

³⁶「六処」(ṣaḍ-āyatana)は「六入(ろくにゅう)」とも呼ばれる。「対象を捉える感覚・知覚の六機能」であり、「視覚(眼)・聴覚(耳)・嗅覚(鼻)・味覚(舌)・触覚(身)・知覚(意)の働き」をいう。

触は生ずる。実に、触は六処を縁とする」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに六処はありや。しかしてまた、六処の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「名（意識の対象）と色（感覚の対象）があるときに六処は生ずる。実に、六処は名色³⁷を縁とする」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに名色はありや。しかしてまた、名色の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「識（認識作用）があるときに名色は生ずる。実に、名色は識を縁とする」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに識はありや。しかしてまた、識の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「行³⁸（心の造作活動）があるときに識は生ずる。実に、識は行を縁とする」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何があるときに〔諸の〕行はありや。しかしてまた、行の縁は何か」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「無明（根本的無知）があるときに〔諸の〕行は生ずる。実に、行は無明を縁とする」[と]。

かくして、実に比丘らよ、菩薩はかくの如く思念せり。「無明を縁として諸の行あり。行を縁として識あり。識を縁として名色あり。名色を縁として六処あり。六処を縁として触あり。触を縁として受あり。受を縁として愛あり。愛を縁として取あり。取を縁として有あり。有を縁として生あり。生を縁として老・死・憂愁・悲歎・苦惱・落胆・迷乱等が生じる。かくの如くにして、この、大なる苦蘊（苦の集積）にすぎざるところのものが生起する」[と]。

比丘らよ、「〔あれが〕生起し、〔次に、これが〕生起する」と、かつて聞かれたることなき諸法を正しく思惟し、繰り返し吟味することにより、菩薩に正智が生じ、〔法〕眼が生じ、明知が生じ、叡智が生じ、賢慮が生じ、智慧が生じ、光明が出現したり。

《それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。³⁹》「何がなければ、老・死は生じざるや。あるいは、何の滅によって老・死は滅するや」と。彼にかくの如き思念が生じたり。「生がなければ、老・死は生ずることなし。生の滅によって老・死は滅する」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何がなければ、生は生じざるや。あるいは、何の滅によって生は滅するや」と。彼にかくの如き思念が生じたり。「有がなければ、生は生ずることなし。有の滅によって生は滅する」[と]。

それから、さらに菩薩はかくの如く思念せり。「何がなければ」云々と、〔途中の〕詳細は略して「諸の行は生じざるや。あるいは、何の滅によって行は滅するや」[と]。彼にかくの如き思念が生じたり。「無明がなければ、諸の行は生ずることなし。無明の滅によって行は滅する。行の滅によ

³⁷ 「名色」(nāma-rūpa) は「古ウパニシャッドにおいて現象世界の名称 (nāman) と形態 (rūpa) とを意味した」が、これが仏教にとり入れられ「名は個人存在の精神的な方面、色は物質的な方面を意味すると解せられた」のであり、十二因縁の中での名色とは「精神的な名と物質的な色との複合体」「個体的存在としての五蘊の全体」をさす（『佛教語大辞典』1300頁参照）と説明される。しかし、ここではむしろ古ウパニシャッドに近い理解として、「名」は「意識の対象としての精神活動」を、「色」は「感覚の対象としての物質存在」を指すものと解釈する。

³⁸ 「行」(saṃskāra) とは「生滅変化する現象世界を不変の実在であるかの如く妄想し、それに執著して起こす意志作用」であると思われるが、「十二因縁の系列に数えられるときには、過去世に行なった善悪の行為をさす語」ともされる（『佛教語大辞典』241頁参照）。『下巻』には「行（行為および行為経験の集積）」と訳したが、「行（心の造作活動）」に訂正する。

³⁹ 《 》内の原文 (atha bodhisattvasya punar etad abhavat) は全写本に欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても、これを挿入すべきである。

て識は滅する」云々と、[途中は]略して、「生の滅によって老・死・憂愁・悲嘆・苦惱・落胆・迷乱等は消滅する。かくの如くにして、この、大なる苦蘊(苦の集積)にすぎざるところのものは消滅する」と。

《かくして、実に⁴⁰⁾》比丘らよ、かつて聞かれたることなき諸法を正しく思惟し、繰り返し吟味することにより、菩薩に正智が生じ、[法]眼が生じ、明知が生じ、叡智が生じ、《賢慮が生じ、⁴¹⁾》智慧が生じ、光明が出現したり。比丘らよ、われは、その時、「これは苦なり」と、如実に了知せり。「これは漏(煩惱)の生起なり。これは漏の消滅なり。これは漏の消滅に至る道なり」と、如実に了知せり。「これは愛欲にまつわる漏なり。これは有(生存)にまつわる漏なり。これは無明にまつわる漏なり。これは見解(思想)にまつわる漏なり。ここにおいて、漏(煩惱)は余すところなく雲散霧消して、滅尽に帰する」と⁴²⁾。「これは無明なり。これは無明の生起なり。これは無明の消滅なり。これは無明の消滅に至る道なり」と、如実に了知せり。「⁴³⁾ここにおいて、無明は余すところなく雲散霧消して、滅尽に帰する」云々と、同様に[途中は省略]して、「これは諸の行なり。これは行の生起なり。これは行の消滅なり。これは行の消滅に至る道なり」と、如実に了知せり。「これは識なり。これは識の生起なり。これは識の消滅なり。これは識の消滅に至る道なり」と、
 222 如実に了知せり。「これは名と色なり。これは名色の生起なり。これは名色の消滅なり。これは名色の消滅に至る道なり」と、如実に了知せり。「これは六処なり。これは六処の生起なり。これは六処の消滅なり。これは六処の消滅に至る道なり」と、如実に了知せり。「これは触なり。これは触の生起なり。これは触の消滅なり。これは触の消滅に至る道なり」と、《如実に了知せり。⁴⁴⁾》「これは受なり。これは受の生起なり。これは受の消滅なり。これは受の消滅に至る道なり」と⁴⁵⁾。[また]「これは愛なり。これは愛の生起なり。これは愛の消滅なり。これは愛の消滅に至る道なり」と。[また]「これは取なり。これは取の生起なり。これは取の消滅なり。これは取の消滅に至る道なり」と。[また]「これは有なり。これは有の生起なり。これは有の消滅なり。これは有の消滅に至る道なり」と。[また]「これは生なり。これは生の生起なり。これは生の消滅なり。これは生の消滅に至る道なり」と。[また]「これは老なり。これは老の生起なり。これは老の消滅なり。これは老の消滅に至る道なり」と。[また]「これは死なり。これは死の生起なり。これは死の消滅なり。これは死の消滅に至る道なり」と、如実に了知せり。「これらは憂愁・悲嘆・苦惱・落胆・迷乱等にして、かくの如くにして、この、大なる苦蘊(苦の集積)にすぎざるところのものが生起し、乃至、消滅する」と、如実に了知したり。「これは苦なり。これは苦の生起なり。これは苦の消滅なり。これ
 224 は苦の消滅に至る道なり」と、如実に了知したり。

かくの如く、まさに比丘らよ、菩薩によって、後夜分(夜の最後の部分)の暁天明けそめるころ、[夜明けを告げる]鼓音の鳴る前に、人土(立派な人)、善士(正善なる人)、傑士(傑出した人)、大士(偉大なる人)、牡牛士(牡牛のような人)、象士(象のような人)、獅子士(獅子のような人)、

⁴⁰⁾ 「かくして、実に」(iti hi)は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

⁴¹⁾ 「賢慮が生じ」(medhōdapādi)は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても、これを挿入すべきである。

⁴²⁾ チベット訳には「〜と」(iti)に当たる訳語はない。

⁴³⁾ 『下巻』にはカギ括弧(「」)を付け忘れていたので、補足する。

⁴⁴⁾ 《 》内の原文は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

⁴⁵⁾ この箇所以降の6箇所において、「如実に了知せり」(yathābhūtam ajñāsiṣam)は、既刊校訂本には挿入されているが、東大主要写本にはなく、チベット訳にも相当訳文が見当たらないので、削除すべきである。

最勝士（最勝なる人）、雄健士（雄健なる人）、勇猛士（勇猛なる人）、貴公士（貴い家柄の人）、蓮華士（蓮華のような人）、白蓮士（白蓮のような人）、重担士（重荷を担う人）、無上調御士（最高の調御者たる人）によって、かくの如き〔すぐれた〕性質の⁴⁶、神聖なる正智をもって知るべき、会得せらるべき、達成せらるべき、照見せらるべき、現証せらるべきところのものは何であれ、その全てが心念の一刹那（一瞬の心の思い）と呼応するところの智慧をもって、無上正等覚が証得せられ、三明（天眼通・宿命通・漏尽通）が獲得せられたり。

そこで、比丘らよ、天神たち⁴⁷は言えり。「諸君、花を散ずべし。世尊は正等覚を得られたり」〔と〕。その時、そこに来集せる、過去の仏陀を見たところの天子たち、彼らは言えり。「諸君、世尊が瑞相を現じたまうまで、しばらく花を散ずることなかれ。過去の正等覚者（仏陀）もまた、瑞相を現じ、神変を化現したまえり」〔と〕。

その時、実に比丘らよ、如来は、かの天子たちが当惑せるを知って、七ターラ樹の高さにまで空中に上昇し、そこに止住（静止）して、次のウダーナ（感興の句）⁴⁸を唱えたり。

- 226 1⁴⁹．〔生死輪廻の〕道は切断せられ、塵埃は鎮められたり。
 諸の漏（煩惱）は枯渴し、再び漏泄することなし。
 切断せられたる道に〔再び⁵⁰〕戻ることがなきが故に、
 これは苦の辺際（終極）と呼ばれるなり、と。

そこで、かの天子たちは天界の花を如来に散じたり。そして、膝の高さにまで天界の花が撒き散らされたり。

比丘らよ、かくして、如来が正覚⁵¹を現証せる時、盲暗は消滅し、渴愛は浄化せられ、邪見は捨離せられ、諸の煩惱は撃退せられ、〔苦悩の〕矢は拔除せられ、纏縛は解かれ、憍慢の旗は降ろされ、法の旗が掲げられ、諸の随眠⁵²は明らかにせられ⁵³、法の真如⁵⁴は了知せられ、真實際⁵⁵（実在の極限）は覚知せられ、法界（全世界）は遍知せられ、衆生界は安立せしめられ、正性定聚⁵⁶は称揚せられ、邪性定聚⁵⁷は非難せられ、不定聚⁵⁸は攝受せられ、衆生の諸根は安立せられ⁵⁹、衆生の諸行は遍知せられ、衆生の病と〔衆生の⁶⁰〕治病法は覚知せられ、甘露なる医薬の処方完成せる医王が出現し、

⁴⁶ チベット訳には「かくの如き性質の」（evambhūtena）に当たる訳語はない。

⁴⁷ 「天神たち」（devā）は、チベット訳では「天子たち」（lhañi bu rnams）となっており、梵文と合わない。

⁴⁸ ウダーナ（udāna：憂陀那）とは「感嘆の詩（仏が感興に乗じて説いた詩の文句）」であり、「無問自説」（問われないのに仏が自ら説いた）と漢訳される（『佛教語大辞典』92頁参照）。

⁴⁹ この偈は、チベット訳では散文訳になっている。

⁵⁰ チベット訳には「再び」に当たる訳語（yañ）がある。

⁵¹ 『下巻』には「等覚」と訳したが「正覚」に訂正する。

⁵² 「随眠」（anuśaya）とは「内心に潜んだ悪への傾向」「表面に現われた煩惱に対して、まだ表面化しない煩惱」を意味する。

⁵³ チベット訳は「諸の随眠は拔除せられ」という意味の訳文になっている。

⁵⁴ 「真如」（tathatā）とは「ありのままのすがた」「普遍的な真理」の意である。

⁵⁵ 「真實際」（bhūtakoti）とは「真実の辺際」「究極の真理」の意である。

⁵⁶ 「正性定聚」（samyaktva-niyata）とは「三定聚の一つである正定聚をいう。必ず未来に善い果報があり、四向四果などを得ると決定されている人びと」である（『佛教語大辞典』701頁参照）。

⁵⁷ 「邪性定聚」（mithyātva-niyata）とは「三定聚の一つである邪定聚」をいい、「決してさとることのない衆生」とされる。

⁵⁸ 「不定聚」（aniyata-rāsi）とは「三定聚の一つ」であり、「正とも邪とも決定されておらず、縁次第で迷悟いずれにでも向かう衆生」である。

⁵⁹ チベット訳は「諸根は子細に観察せられ」という意味の訳文になっており、梵文と合わない。

⁶⁰ この「衆生の」（sattva）は、諸刊本、諸写本に挿入されているが、文脈上不要であり、チベット訳にもそれに当たる訳

一切の苦より解脱せしめ⁶¹、涅槃の樂に安住せしめ⁶²、如来の胎藏⁶³、[すなわち]如来の法王の《偉大なる座に⁶⁴》坐し、解脱の繒帛は結ばれ⁶⁵、一切智の都城に入り、一切の仏陀と親しく交流し、法界全体⁶⁶の証得において[諸仏と]差別なき者となれり。比丘らよ、如来は、[成道後]最初の七日
228 間を、正にこの菩提の座に坐し続けたまえり。「今や、[われは無上なる正等覺を証得したり。]⁶⁷ われは、始終なき⁶⁸生・老・死の苦を終滅せしめたり」と[思念しつづ]。

実にまた、比丘らよ、菩薩が一切智を獲得するや否や、その時、まさにその刹那に、十方における、一切の世界の、全ての衆生は、その刹那、その瞬間、その須臾の間に、最高の至福に満たされたり。また、一切の世界は、偉大なる光明に照らされて、かの、苦痛に満ちた、悲惨なる、世界中間なるところの暗黒もまた、云々と、上述の如し。また⁶⁹、十方における一切の世界は、六種に震動し、激しく震動し、あまねく震動せり。揺れ、激しく揺れ、あまねく揺れたり。動き、激しく動き、あまねく動けり。動揺し、激しく動揺し、あまねく動揺せり。響き、激しく響き、あまねく響けり。轟き、激しく轟き、あまねく轟けり。また、一切の仏陀は、正覺を現証せる如来に対して「善哉」との讚辞を発したり。また、諸の法の傘蓋を奉獻せり。それらの法の傘蓋[が合すること]によって、この三千大千世界は、一つの宝蓋に遍覆せられたり⁷⁰。また、それらの⁷¹宝蓋より、かくの如き種類の、光明の網が出現したり。[すなわち]それらによって、十方の無量無数の世界が照らされて、十方の菩薩たちと天子たちは歡喜の声を発したり。「賢明なる衆生の蓮華が、正智の池に生起し、世間の法に汚されずして成長したり。大悲の雲が沸き起り、法界の宮殿⁷²に遍満し、教化すべき⁷³有情の医薬たる法雨にして、一切の善根の種子を發芽させ、淨信の芽を成長させて、解脱の果を實らせるところの雨を降らしむべし」と。
230

そこで、かくの如く言われる。

2. 実に、かの人中の獅子なる者が、マーラ(悪魔)を軍勢もろともに制圧し、

語はないから、削除すべきである。

⁶¹ チベット訳は「解脱せしめる者と成り」という意味の訳文になっている。

⁶² チベット訳は「安住せしめる者と成り」という意味の訳文になっている。

⁶³ 「如来の胎藏」(tathāgatagarbha)は方広に「如来藏」と訳されているが、『國譯一切經』(本縁部九)の当該部分の註(180頁註32)には「普通に佛性真如の煩惱中にあるを如来藏といふも、ここは次の智慧城に対照するに、如来の寶藏などの意に解すべし」と記されている。

⁶⁴ 「偉大なる」(mahā)と「座に」(āsana)は東大主要写本に欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても、これらを挿入すべきである。

⁶⁵ チベット訳は「解脱の方便は獲得せられ」という意味の訳文になっているが、方広は「結解脱繒」と訳している。「繒帛」とは「きぬのひも」であり、「王位をあらわす冠飾のひも」を指す。

⁶⁶ チベット訳には prasara(全体)に当たる訳語はない。方広には「同諸如来清淨法界」と訳されている。

⁶⁷ []内の原文(mayānuttarā samyaksaṃbodhir abhisambuddhā)は、チベット訳に相当訳文が見当たらないから削除すべきである。この原文は後代の追加と思われる。

⁶⁸ 「始終なき」(anavarāgra)とは「始まりも終わりもない」の意であり(cf. BHSD)、「無窮なる輪廻」を意味すると思われるが、チベット訳では「無始なる」(thog ma med pa)となっている。この梵語に対応するとされるパーリ語の anamatagga(an-amata-agga)は「その始めが量られざる；無始の；無窮の」の意であるとされる(水野弘元『パーリ語辞典』、春秋社、1995(二訂)、14頁)ので、「果てしなく永続する」という意味では、梵文もチベット訳も同じなのかもしれない。

⁶⁹ チベット訳には「また」(ca)に当たる訳語はない。

⁷⁰ この部分は、方広には「其諸寶蓋合成一蓋。遍覆十方三千大千世界」と訳されている。

⁷¹ 「それらの」(tebhyas)は複数形であるが、チベット訳では「その」(de)と単数形で訳されており、梵文と合わない。

⁷² 「法界の宮殿」(dharmadhātu-bhavana)とは「法性のあらわれである全世界を如来の住する宮殿に見立てたもの」と考えられる。『下巻』には「法界の住処」と訳したが、「法界の宮殿」に訂正する。

⁷³ vineyaは「教化すべき(弟子)」の意である。方広には「堪受教法者」と訳されている。

また、師たる者（釈迦牟尼）が禪定の樂に専念したまいて、
 十力尊たる者（仏陀）によって三明の智が獲得せられたる、
 まさにその時、十方の幾拘胝もの〔仏〕国土⁷⁴は震動したり。

3. 〔仏陀の〕面前に来集せる⁷⁵、〔正〕法を愛樂する菩薩たちは、
 〔仏陀の〕足もとに平伏して、かくの如く述べたり。
 「疲倦あることなきや。われらの面前にて、あれほどに悍ましき、かの軍勢は、
 〔御身の〕智慧・福德の力と精進力とによって摧破せられたり」〔と〕。

4. また⁷⁶、諸の仏陀は那由多もの〔仏〕国土より傘蓋を献上したり。
 「善哉、大士よ、マーラ（悪魔）の軍勢は降伏せられたり。

御身は、不死にして憂悩なき至高の地位を得たり。
 三界に正法の雨を速やかに降らしめたまえ」〔と〕。

5. 十方における最良の衆生（仏陀）たちは、腕を伸ばして、
 カラヴィンカ⁷⁷鳥の囀りの如き言葉をもって告げたり。
 「われらに菩提が得られたるが如く、御身は正覚を得たり。
 あたかも、酥と醍醐⁷⁸との相似せるが如くなり」〔と〕。

232 かくして、実に比丘らよ、欲界のアプサラス（天女）たちは、菩提の座に坐せる如来が神通を獲得し、目的を成就し、戦闘に勝利し、マーラなる怨敵を打ち破り、傘蓋・旗幟・幢幡を掲げ、勇敢にして、勝利によって輝き、丈夫にして大丈夫であり、最高の医者にして偉大なる外科医であり、獅子の如くにして恐怖に身毛豎立することなく、象の如く心をよく制御し、三垢（貪・瞋・痴）を滅除せるが故に垢穢あることなく、三明の智（宿命智・天眼智・漏尽智）を得たるが故に賢者であり、四瀑流⁷⁹を渡れるが故に到彼岸者⁸⁰であり、唯一の宝蓋を保持せるが故にクシャトリア〔の王〕であり、悪法を捨離せるが故に三界のパラモンであり、無明の卵殻を破碎せるが故に比丘であり、一切の愛著を超出せるが故に沙門であり、煩惱を断滅せるが故に淨行婆羅門⁸¹であり、〔軍〕旗を降ろさざるが故に勇者であり、十力を有するが故に豪傑であり、宝蔵の如く一切の法宝を具足せる〔者であること〕を知って、菩提⁸²の座に向かい、かくの如き偈を以て、如来を⁸³讚歎せり。

6. 彼は樹王の下にて、マーラ（悪魔）の軍を制圧し、
 怯えることなく逃走することもなく、メール山の如く不動にして坐せり。

7. 彼は、幾拘胝もの劫において、布施・自制・律義によって、
 無上の菩提を修集⁸⁴せり。それ故、今宵、彼は輝けり。

⁷⁴ チベット訳には「仏国土」（sañs rgyas shiñ）と訳されている。

⁷⁵ 「面前に来集せる」の部分のチベット訳は「共に来集せる」という意味の訳文になっている。

⁷⁶ チベット訳には「また」（ca）に当たる訳語はない。

⁷⁷ kalaviñkaについては、第21巻第1号所載の拙訳（註128）を参照されたい。

⁷⁸ 「酥と醍醐」については、第20巻第1号所載の拙訳（註454）を参照されたい。

⁷⁹ 「四瀑流」とは「欲瀑流・有瀑流・見瀑流・無明瀑流」である。

⁸⁰ 「到彼岸者」とは「輪廻の苦海を渡り終えて涅槃の彼岸に達した者」である。

⁸¹ 「淨行婆羅門」（śrottriya）とは「ヴェーダ聖典に通じた博学のパラモン」である。

⁸² 『下巻』には「菩薩」と誤記したので、「菩提」に訂正する。

⁸³ チベット訳には「如来を」（tathāgatam）に当たる訳語はない。

⁸⁴ 「修集」（samudānita）とは「修行して身に集めること」である。

8. 実に、無上の菩提を尋求するが故に、彼は、幾拘胝もの劫における、持戒・禁戒・苦行によって、帝釈・梵天をも暗冥ならしめたり。
9. 彼は、幾拘胝もの劫において、忍辱力の鎧を被り、諸の苦を忍耐したり。それ故に、[今] 金色の光明あり。
- 234 10. 彼は、幾拘胝もの劫において、精進力と剛勇によって、[敵なる] 他者を敗走せしめたり。それ故に、マアラの軍に勝利せり。
11. 彼は、幾拘胝もの劫において、禪定と神通智によって、諸の牟尼尊⁸⁵を恭敬したり。それ故に、今宵まさに⁸⁶供養せられたり。
12. 彼は、幾拘胝もの劫において、智慧と多聞⁸⁷とを積集することにより、数拘胝もの衆生を饒益⁸⁸したり。それ故に、速やかに菩提を得たり。
13. 彼は蘊魔⁸⁹に勝ち、また、死[魔]と煩惱魔に[勝てり]。彼は天魔⁹⁰にも勝てり。それ故に、彼に憂悩あることなし。
14. 彼は偉大なる天中天にして、【諸天神からも供養せらるべく⁹¹】三界(全世界)において供養されるに値せり。
- 福德を希求する者たちの[福]田⁹²にして、甘露の果を与える者なり。
15. 彼は最高の応供者⁹³にして、[彼に対して]捨施せられたる布施の功德は、実に⁹⁴、無上の菩提が獲得されるまでの、その間において、消失することなし。
16. 彼の[眉間白]毫から光明を發し、幾拘胝もの[仏]国土が遍照せられたり。日月等[の光明]は覆蔽せられたるも、諸の衆生は明るく照らされたり。
17. 彼は、実に、身色美麗にして、顔容端正、容貌端嚴なり。優美なる相を有する者、[衆生の]安樂を願う者、三界にて供養せらるべき者なり。
18. 自存者なる彼の眼は極めて清淨にして、多くのものを觀察せり。[すなわち]諸の国土と衆生の身体⁹⁵と、心識あるものと心識なきものとを。
- 236 19. 彼の耳は極めて清淨にして、無数の音声を聴聞せり。[すなわち]諸の天界と人界の[音声]、また、勝者(仏陀)の法語なる音声を。
20. 彼の舌は長広にして、カラヴィンカ鳥の如く音声優美なり。寂滅に導く甘露の法を、彼より、私たちは聞くならん。

⁸⁵ 「牟尼尊」(munindra)とは「牟尼の王(偉大なる聖人)」の意である。

⁸⁶ チベット訳には「今宵ここに」(do mod hdi la)と訳されている。

⁸⁷ 「多聞」とは「多くを聞き学び知っていること」つまり「博識」の意である。

⁸⁸ 「饒益」とは「利益を与えること」である。

⁸⁹ 「蘊魔」とは「五蘊相合の身体」をさす。身体は心の平和を乱す原因となるから、魔の一種とされる。

⁹⁰ 「天魔」とは「仏道をさまたげる天子魔」であり、通常は「欲界最上位にある他化自在天の魔王」をさす。なお、「煩惱魔・蘊魔・死魔・天魔」を「四魔」(衆生を悩ます四種の魔)と呼ぶ。

⁹¹ 【】内の原文は全写本にあり、チベット訳にも相当訳文があるが、文脈上も韻律上も不要である。

⁹² 「福田」とは「福德を育てる田地」の意であり、「その人に供養することによって多くの福德を積むことができるような、徳の高い聖者」を意味する。

⁹³ 「応供者」とは「供養を受けるにふさわしい人」の意。

⁹⁴ 「捨施せられたる布施の功德は、実に」の部分、チベット訳では「彼に布施をほどこすならば、それは」という意味の訳文になっている。

⁹⁵ 「衆生の身体」は、方広には「衆生身業事」と訳されている。

21. マーラの軍勢を見たりといえども、彼の心意は動揺することなく、
また、天衆を見たりといえども、妙慧ある彼は歡喜することなし。
22. 刀劍や矢などによって、彼はマーラの軍を破りたるにあらず。
眞実・禁戒・苦行〔の力〕によって、彼は悪しき力士に勝利せり。
23. 〔菩提の〕座より動くことなくして、しかも彼の身体は傷害せられざりき。
その時に、〔彼の心に〕愛著あることなく、瞋恚を生じることなかりき。
24. 御身の法を聴いて、正行⁹⁶を修習せんと欲するところの人間や天神たち、
彼らには、実に、利得がよく獲得せらるべし。
25. 勝者の福德と威光に満ちたる者よ、御身を称讃せる、その福德により、
〔私たちは〕みな、速やかに、人中の月なる御身に等しき者に成らんことを。
26. 人中の牡牛たる導師（釈迦牟尼）が菩提を証得し、
那由多もの〔多くの〕国土を震動せしめ、マーラを降伏するや、
梵天の如き音声、カラヴィンカ鳥の囀りの如き言音をもって、
導師は、まず最初に、この（次の）偈頌を説きたまえり。
- 238 27. 「福德の果報は安樂にして、一切の苦惱を滅除する。
また、福德を有する人間の願望は成就せられる。
また、マーラを降伏して、速やかに菩提を証得する。
〔さらに〕また、寂滅の清涼なる境地たる涅槃に達する。
されば、福德を造作することに、誰が厭足の念を生ずべけんや。
また、甘露の法を聴いて、誰が厭足の念を生ずべけんや。
また、人なき林中に止住して、誰が厭足の念を生ずべけんや。
衆生の利益を為作⁹⁷することに、誰が厭足の念を生ずべけんや。」
29. そして⁹⁸、〔如来は〕手を伸ばして、〔來集せる〕菩薩たちに告げたり。⁹⁹
〔供養は〔すでに〕為されたり。各自の国土に戻られよ〕〔と〕。
〔菩薩たちは〕みな、如来の足もとに敬礼をなしてから、
さまざまの莊嚴をもって、それぞれの国土に去りゆけり。
30. また、かの、ナムチ（悪魔）たちの大襲來を見て、¹⁰⁰
同じくまた、善逝が悠然として遊戯神變を現じたるを見て、
諸の衆生は、比類なき心を以て菩提に向けて發願せり、
「勢力あるマーラ（悪魔）を降伏して、甘露を得べし」〔と〕。
- 比丘らよ、如来が、菩提樹下において、獅子座に坐して正覚を現証せる時、その刹那に、無量な

⁹⁶ 「正行」(pratipatti) とは「聖道に入るための正しい実践」の意である。

⁹⁷ 「為作」とは「つくり出すこと」である。

⁹⁸ チベット訳には「そして」(ca) に当たる訳語はない。

⁹⁹ この一行のチベット訳は「菩薩は手を伸ばして告げたり」という意味の訳文になっているが、これはチベット訳者の誤解と思われる。釈迦牟尼はすでに菩薩ではなく正覚者だからである。

¹⁰⁰ この一行のチベット訳は「〔マーラの〕軍勢がおびただしく出現したる、それを見て」という意味の訳文になっている。

る仏陀の遊戯神変が出現したり。それらは、一劫 [もの長時間] を以てしても、説き尽くすこと容易ならざるなり。

240 そこで、かくの如く言われる。

31. この¹⁰¹大地は、^{てのひら}掌の如く平坦なるものと成り、
幾百もの満開の花弁が、光明を發して出現したり。
[また] 百千もの天神たちが菩提の座に^{おじぎな}御辞儀を為せり。
この [如来による] ^{ししよく}獅子吼の第一の前兆が、今ここに見られたり。

32. 三千 [世界] の幾百もの樹木が菩提の座に御辞儀を為せり。
^{しゅうほう}無数の秀峰¹⁰²や、山王メールも、同様に [お辞儀を] 為せり。
[また] 梵天と帝釈天も^{じゅうりきしや}十力者 (如来) に近づき御辞儀を為せり。
これまた、^{にんちゅう}人中の獅子なる者が菩提の座に^{げん}現ずる遊戯なり。

33¹⁰³. また、[如来が] 身体より百千の光明を發して、
^{しょうしや}勝者 (諸仏) の^{みょうこくど}妙国土を^{へんしょう}遍照するや、^{さんあくしゆ}三悪趣は^{ちんせい}鎮静せられ、
また、その後の^{せつな}刹那・^{しゆゆ}須臾の間に、^{むかしよ}無暇處は^{かんさん}閑散となれり。
また^{ふんこん}忿恨・^{じょうよく}情欲・^{しんに}瞋恚 [等] は、如何なる衆生をも苦しめざりき。
これまた、[菩提の] 座に坐せる人中の獅子 (如来) の遊戯なり。

34. 月・太陽・^{ほうじゆ}宝珠・火・電光、また、天の光明は、
^{びやく}光輝ある者 (如来) の [白] ^{こうそう}毫相に^{ふくへい}覆蔽されて輝きを失えり。
衆生は、今や¹⁰⁴、^{だいし}誰も大師 (如来) の頭頂を視ることを得ざりき。
これまた、[菩提の] 座に坐せる人中の獅子 (如来) の遊戯なり。

242 35. また、^{てのひら}掌で触れられた大地は、六種に震動し、
それによって、ナムチ (悪魔) の軍勢は^{とらめん}兜羅綿¹⁰⁵の如く吹き飛ばされたり。
ナムチは矢を^と把り、[悄然として] 地面に [何かを] ^{かえが}搔き描けり¹⁰⁶。
これまた、人中の獅子 (如来) が [菩提の] 座にて遊戯を現じたるなり、と。

[以上] 「成正覚品」と名づける第22章なり。

¹⁰¹ チベット訳には「この」(iyam) に当たる訳語はない。

¹⁰² 「秀峰」(girivara) は、チベット訳には単に「山々」(ri rnams) と訳されている。

¹⁰³ この偈は5行で一偈を成していると見なされる。

¹⁰⁴ チベット訳には「今や」(iha) に当たる訳語はない。

¹⁰⁵ 「兜羅綿」(tūla) とは「軽い綿」であり、「寝台の中に入れる綿の一種」である (『佛教語大辞典』995頁参照)。

¹⁰⁶ チベット訳は「何かの文字を書けり」という意味の訳文になっている。戦闘に敗れたマーラ (悪魔) が悄然としている風景を、「棒のようなもの (ここでは矢) で地面に何かを描いている姿」として描写するのは、古くから伝わる表現法である。この場面の方広には「以杖而畫地 (杖を以て地を畫く)」と訳されている。

第23章（讚歎品）¹⁰⁷

- 244 また、その時、淨居天に属する天子たちは、菩提の座に坐せる如来を右遶して、天界の栴檀の香末を注ぎかけて、かくの如き、《適切なる¹⁰⁸》偈を以て讚歎せり。
1. 世間に燈火を点す者は出現したり。世間の庇護者【よ】、光明を放つ者【よ¹⁰⁹】。
盲闇となれる世間に、煩惱を捨てたる者（如来）は、眼を与えたまう。
 2. 御身は戦闘に勝利し、諸の福德により願望を成就せり。
また、白淨の法を円満具足せり。御身は衆生を満足せしむべし。
 3. 実に〔御身〕ガウタマは罪業なく、泥中より脱して陸地に安住せり¹¹⁰。
〔御身は〕大暴流に流されたる他の衆生をして〔彼岸に〕渡らしむべし。
 4. 偉大なる智慧ある者よ、御身は卓越し、諸世間において無比なる人物なり。
世間の諸法に汚染せられざる、御身は水中に生えたる蓮華の如し。
 5. 久しく昏睡し、闇の聚塊に覆われたる、この世間を、
御身は、智慧の燈明によって、能く覚醒せしめたまわん。
 6. 煩惱の病に逼悩せられて、久しく苦しめる¹¹¹生類の世界に、
一切の病から解放する医王たる御身は¹¹²出現したまえり。
 7. 〔世間の¹¹³〕庇護者なる御身が出現したるが故に、諸の無暇處は閑散たるものとなり、
諸の人間と天神たちは、実に、安樂に満ちたるものとなるべし。
- 246
8. 優美なる人中の牡牛たる御身の姿を目にするところの、
その者たちは、千劫にわたり、決して悪趣に赴くことなからん。
 9. 〔御身の〕法を聴くところの、その者たちもまた、伶俐にして壮健なる者、
深遠にして、執著を滅尽せる者、怖畏なき者と成るべし。
 10. また、みな、煩惱の繫縛を断ち切り、速やかに解脱して、
取著の念を離れたる¹¹⁴、清淨なる最高の果報を得るに到らん。
 11. また彼らは、世間の応供者にして諸供物を受納するに値する者に成り、
彼らに対する布施の功德は少なからずして、全てが涅槃の因となるべし。

かくの如く、実に比丘らよ、淨居天に属する天子たちは、如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、〔合掌して¹¹⁵〕一方に立てり¹¹⁶。

¹⁰⁷ 方広にも「讚歎品」と訳されている。

¹⁰⁸ 「適切なる」(sārūpyābhir) は全写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹⁰⁹ 「世間の庇護者」「光明を放つ者」は、いずれも主格とも呼格とも見なされうる。呼格とみれば、「世間の庇護者よ」「光明を放つ者よ」と訳することになる。

¹¹⁰ 「下巻」には「安立せり」と訳したが、「安住せり」に訂正する。

¹¹¹ チベット訳には「苦しめる」(ātura) に当たる訳語がなく、「久しく煩惱の病に逼悩せられたる」という意味の訳文になっている。

¹¹² チベット訳には「御身は」(tvam) に当たる訳語はない。

¹¹³ チベット訳には「世間の」に相当する訳語 (hjig rten) がある。

¹¹⁴ 「取著の念を離れたる」(nirupādāna) とは「世俗的欲望から解放された」の意である。

¹¹⁵ この箇所「合掌して」(prañjalayas) は、文脈上不要であり、チベット訳にもこれに当たる訳語はない。

¹¹⁶ 「一方に立つ」とは「特定の場所に自分の立ち位置を決める」の意である。方広には「於一面立（一面に於て立つ）」と訳

さて、その時また、光音天の天子¹¹⁷たちは、菩提の座に坐せる如来を、天界の¹¹⁸、色々な種類の花・
 薫香・香料・花環・塗油・傘蓋・旗幟・幢幡によって供養し¹¹⁹、右邊三匝なせるのち、かくの如き
 偈を以て讚歎せり。

12. 甚深なる覚知ありて、甘美なる音声^{おんじょう}を有する、牟尼よ。
 最勝なる牟尼よ、梵音^{ぼんおん}の歌の如く音声優雅なる者よ、
 最勝殊妙にして秀逸無上なる菩提を獲得せる者よ。
 一切の音声の彼岸^{ひがん}に達したる者よ、御身に帰命せん。
- 248 13. 御身は救助者、御身は洲^{しま}、御身は帰依處にして、
 御身は慈心^{じしん}を行ずる世間の庇護者なり。
 御身は、実に¹²⁰、矢を拔除する最高の医者にして、
 病を癒し福利を与えること、御身を至上となす。
14. ディーパンカラ¹²¹ (燃燈^{ねんとう}) 仏に^{かいぐう}会遇するや否や、
 御身は、慈と悲愍の雲の網縵^{もうまん}を修集したり。
 庇護者よ、甘露^{かんろ}の滴^{しずく}の雨を降らしめて、
 天神や人間の熱惱^{ねつのう}を鎮めたまえ。
15. 御身は、三界^{さんがい}において汚染せられざること蓮華の如く、
 御身の堅固にして動揺せざること、実にメール山の如し。
 御身の誓言^{せいごん}の堅固なること、実に金剛^{こんごう}の如く、
 御身は¹²²最勝なる徳の全てを有する月 [の如き者] なり¹²³。

かくの如く、実に比丘らよ、光音天の天神たちは、如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼し
 つつ、一方に立てり。

それからまた、[比丘らよ¹²⁴] スブラフマン¹²⁵ (善梵^{ぜんぼん}) 天子を初めとする、梵衆天^{ぼんしゅてん}¹²⁶の天神たちは、
 菩提の座に坐せる如来を、幾百千拘胝那由多もの珠寶^{じゅほう}の象嵌^{ぞうがん}せられたる宝石の網を以て覆い、右
 邊三匝なせるのち、かくの如き、適切なる偈を以て讚歎せり。

- 250 16. 清浄・無垢なる智慧の光明と威光とを有し、
 最勝なる、三十二の妙相を具有せり。

されている。

¹¹⁷「光音天の天子」は、方広には「遍光天子」と訳されている。

¹¹⁸チベット訳には「天界の」(divyair)に当たる訳語はない。

¹¹⁹「供養し」の部分のチベット訳は「作法に則り供養し」という意味の訳文になっている。

¹²⁰チベット訳には「実に」(khalu)に当たる訳語はない。

¹²¹dipamkara (燃燈仏)については、第19巻第1号所載の拙訳(註39)を参照されたい。

¹²²チベット訳には「御身は」(tvam)に当たる訳語はない。

¹²³「月なり」の部分のチベット訳は「月の如し」という意味の訳文になっている。

¹²⁴「比丘らよ」(bhikṣavaḥ)は東大主要写本に挿入されているが、チベット訳には相当訳語がないので削除すべきである。

¹²⁵subrahmanは「賢善なる梵天」の意であり、ここでは「梵衆天の主の名」として用いられているが、方広にはこの名に
 当たる訳語は見当たらない。

¹²⁶「梵衆天」(brahma-kāyikāḥ)については第19巻第4号所載の拙訳(註103)を参照されたい。『下巻』には「梵身天」と
 訳したが「梵衆天」に訂正する。方広にも「梵衆天」と訳されている。

- 正念あり、英知あり、功德と¹²⁷妙智を有して、
 疲倦あることなき、御身を〔われらは〕頭面をつけて礼拝せん。
17. 三垢¹²⁸の穢れあることなく、無垢・清浄にして、
 三界に名声が鳴り渡り、三明¹²⁹を得たり。
 最勝なる三種の解脱¹³⁰なる眼を与える者にして、
 清浄なる三眼¹³¹を有する、御身を礼拝せん。
18. [御身は] 悪世の濁穢を拔除し、溫柔なる心意を有し、
 哀愍と悲心とによって卓越し、衆生に利益を与えたまう。
 牟尼の喜心によって卓越し、寂静なる心意を有する、
 御身は疑念より解放する者にして¹³²、捨心に安住せり。
19. [御身は] 禁戒と苦行とによって卓越し、衆生に利益を与え、
 自らの所行は清浄にして、所行の彼岸に達したり。
 [御身は] 四諦を顕示して、解脱に安住し、
 [自ら] 解脱して、他の衆生をも解脱せしめたまう。
20. 剛力と威勢とを有するナムチ（悪魔）が、ここに來たれるも、
 智慧による精進と、また慈心によって（悪魔を）降伏したまえり。
 また、御身は、不死なる至高の地位を獲得せり。
 邪悪なる軍勢を滅尽せる、御身を〔われらは〕礼拝せん。

252

かくの如く、実に比丘らよ、スブラフマン天子を初めとする、梵衆天の天神たちは、かくの如き偈を以て如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

その時、《また¹³³》かの清白の部に属するマーラ（悪魔）の息子たちは、如来の在すところに近づき来たりて、大きな宝石の傘蓋と帳蓋とを以て如来を覆い、合掌して、如来を、かくの如き適切な偈を以て讚歎せり。

21. 極めて強大なる御身の力と恐るべきマーラの軍勢とを、我らは眼前に見たり。
 かの、甚だ畏怖すべきマーラの軍勢をも、御身は一刹那のうちに制圧したり。
 御身の身体は立ち上がることなく慄えることもなく¹³⁴、また言葉を発することもなかりき。
 一切の目的を成就せる¹³⁵牟尼よ、一切世界に¹³⁶尊崇せられたる御身を、我らは礼拝せん。

¹²⁷ チベット訳には「功德と」(guṇa)に当たる訳語はない。

¹²⁸ 「三垢」とは「貪欲・瞋恚・愚癡」のこと。

¹²⁹ 「三明」とは「宿命通・天眼通・漏尽通」のこと。

¹³⁰ 「三種の解脱」とは「空・無相・無願」の三解脱門を指すと思われる。

¹³¹ この「三眼」は「肉眼・天眼・聖慧眼」の三種を指すと思われる。

¹³² 方広には「獨除三疑（三疑を獨除〔けんじょ〕して）」と訳されている。「三疑」については詳細不明であるが、法蔵館『総合佛光大辞典』（237頁「疑」の項目）には「自らを疑い、師を疑い、法を疑うのを三疑という」との説明がある。

¹³³ 「また」(khalu)は、東大主要写本には欠けているが、文脈上の整合性からみて挿入すべきである。

¹³⁴ 「御身の身体は立ち上がることなく、慄えることもなく」の部分、チベット訳では「御身は立ち上がることなく、また、身を慄わせることもなく」という意味の訳文になっている。

¹³⁵ 「一切の目的を成就せる」(sarvārthasiddha)は、釈尊の個人名（サルヴァールタシダ）と見ることも可能である。

¹³⁶ 「一切世界」(sarvaloka)は、チベット訳には「三界」(hjiḡ rten gsum)と訳されており、梵文と合わない。

22. ガンジス河の砂塵に等しき、^{いくせんコーティナユタ}幾千拘胝那由多ものマールラたち¹³⁷、
彼らは、御身を菩提の大樹より動かし離れしむること能わざりき。
ガンジス河の砂に等しき、幾千拘胝那由多もの祭式を設けて、
[その後]菩提樹下に坐したれば、その故に御身は、今日、光り輝きたまえり。
- 254 23. 最愛の妻や、^{いと}愛しき息子たち、また、下女や下男たち、
[自分の]^{おんりん じょうゆう}園林や城邑、^{じゅうらく}領地や聚落、^{ちゅうぐう さいによ}王国や中宮 [姪女たち]、
手¹³⁸・足・頭や、また、^め眼や舌なども、御身が^{ぼだいぎょう}至上の菩提行を修行せる時、
^{しゃせ}捨施せられたり。それ故に、[御身は]今日、光り輝きたまえり。
24. 御身によって、「われは仏陀と成るべし。禪定・^{じんりき}神力・^{よろい}覚知の鎧を身に着けて、
^{くかい}苦海に流されたる^{いくコーティナユタ}幾拘胝那由多もの [多くの] ^{しょうぼう}衆生を、^{しょうぼう}正法の船によって、
自ら渡らしむべし」と、^{しばしば}幾度となく発せられたる言葉、
まさにその御身の^{せいがん}誓願は成就せられたるが故に、^{もろもろ しょうるい どだつ}諸の生類を度脱せしめたまえ。
25. ^{ろんじちゅう}論師中の^{まなこ}牡牛にして世間に眼を与える者 (仏陀) を¹⁴⁰讚歎せるところの功德により、
我らはみな心に^{かんぎ じやく}歡喜踊躍を生じ、一切智の地位を^{がんぐ}願求せり。
^{もろもろ}諸の^{しん}仏陀によって^{しょうぼう}稱讚せられたる、^{しょうぼう}比類なき^{しょうぼう}至上の菩提を^{しゅうじゅう}修集して、
[御身と] 同様に、かのマールラの^{けんぞく さいぶく}眷属を^{いっさいち}摧伏し、一切智の地位を [我らも] 証得せん。

かくの如く、実に比丘らよ、マールラの息子たちは、如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に《立てり¹⁴¹》。

さて、それから、他化自在天子は、幾百千もの [多くの] 天子たちに^{いによう}圍繞せられ、侍従せられて、ジャンプー河産の¹⁴²黄金色の蓮華を如来に散じて、面前にて、かくの如き偈を以て讚歎せり。

- 256 26. 言語には^{ごんわく}虚偽あることなく、^{ごんわく}昏惑なく、^{ごんわく}混乱することなく、
^{ちみょう ざいく}癡冥と^{ごんわく}罪垢とを^{ごんわく}滅除して、^{しょうとく}甘露 (不死) の道を^{しょうとく}證得し、
天界と人界との^{ごんわく}威徳と所作とにおいて [御身は] 無比なる地位にあり。
^{さんぜん}燦然たる¹⁴³正念と^{えいち}英智とを有する者を、[われは] ^{ずめん}頭面をつけて礼拝せん。
27. ^{じんあい ぐえ}悦楽を生じ、^{じんあい ぐえ}煩惱を滅し、^{じんあい ぐえ}塵埃と垢穢とを除去し、
非常に^{かいかつ}快活なる言葉によって、[御身は] 天神や人間を喜ばせたまう。
^{こうぼく}美しき身体より^{こうぼく}広博たる^{こうぼく}光明が発散せられたれば、¹⁴⁴
天神と人間との王たるが如く、[御身は] この世界に君臨せり。
28. ^{さいは}敵衆を^{さいは}摧破し、^{つうだつ}最高の所行に通達し、

¹³⁷「マールラたち」(mārah) は、チベット訳には「マールラの娘たち」(bdud kyi bu mo) と訳されており、梵文と合わない。方広には「魔衆」と訳されている。

¹³⁸「手」(hasta) は、チベット訳には「象」(glañ po[= hastin]) と訳されており、梵文と合わない。

¹³⁹チベット訳には「御身が」(te) に当たる訳語はない。

¹⁴⁰「世間に眼を与える者を」の部分のチベット訳は「世間に眼を与える御身を」という意味の訳文になっている。

¹⁴¹東大主要写本には「立てり」(tasthuḥ) が欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

¹⁴²チベット訳には「色」(varṇa) に当たる訳語はない。

¹⁴³チベット訳には「正念と」(smṛti) に当たる訳語はない。なお、『下巻』の訳文には、不注意により「正念と」が欠落しているので、これを挿入する。

¹⁴⁴この一行のチベット訳は「美しき身体から光明が発散せられ、塵垢は全くなきが故に」という意味の訳文になっている。

人間と天神との世界において愛好せられ、他者の存念を清め、
甚だ賢明にして思慮深く、最高の所行を〔衆生に〕分与したまう。
今や、〔御身は〕十力ある者の赴く道¹⁴⁵を進みたまえ。

29. 多大なる生存への執著と虚妄なる〔大¹⁴⁶〕苦悩の繫縛とを捨棄し、
天神や人間の存念と礼節（律）とを正しく教導し、
〔御身は〕天空にある月の如く、四方に周遊したまえり。
この三界の地において¹⁴⁷、〔衆生の〕眼また帰依處と成りたまえ。

30. 人間と天界とへの愛着も、また、感官の対象への錯乱もなく、
愛欲の享樂を捨離して、清浄なる安樂を享受したまえり。

258 大衆に向かって咆哮すること、三界において御身に並ぶ者なし。
実に、御身は今や、生類の救助者、保護者、帰依處なり。

かくの如く、実に比丘らよ、〔他化〕自在天子を初めとする、他化自在天の天子たちは、如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

それから、また、スニルミタ¹⁴⁸（化樂）天子は、天神衆に圍繞せられ、侍従せられて、種々なる【寶石の¹⁴⁹】繪綵¹⁵⁰によって如来を覆い、面前にて、かくの如き偈を以て讚歎せり。

31. 御身は、三種の垢穢を駆逐したるが故に、法の光明を発したり。

愚癡と邪見と無明とを摧滅し、慚恥と榮譽とに満ち溢れたり。

邪妄の道に耽惑せる、これらの民衆を甘露（不死）へと誘導したまえば、

〔御身は〕この世間に出現したる塔廟として¹⁵¹、天界と人界とに供養せられたり。

32. 御身は治療に熟達せる医者にして、まさに甘露の樂を与えたまう。

邪見と煩惱と無明との積集と、前生からの随眠と、

有身の者たち（衆生）のあらゆる病とを、往昔の勝者の道により滅除したり。

それ故に、至上の医師なる導師として、御身は地上に遊行したまえり¹⁵²。

33. 日月の光明、また、星辰、宝珠、はたまた火焰、帝釈・梵天の光明ですら、

功德聚〔たる御身〕の前にては輝映あることなし。

智慧光を放ち、照耀として、光明と威光とに溢れたる、

御身の希有なる正智を眼前にして、〔われは〕頭面をつけて礼拝せん。

34. 甘美なる言葉を語る教導者にして、眞実と非眞実とを説示し、

¹⁴⁵『下巻』には「十力ある者に赴く道」と訳したが、「十力ある者の赴く道」に訂正する。釈迦牟尼はすでに「十力ある者（仏陀）」だからである。

¹⁴⁶東大主要写本には「大」（mahā）が挿入されているが、チベット訳にはこれに相当する訳語はなく、文脈上も韻律上も不要であるから削除すべきである。

¹⁴⁷チベット訳は「この三界の地において傑出し」という意味の訳文になっている。

¹⁴⁸sunirmitaは「化樂天王の名」として用いられる。

¹⁴⁹「種々なる宝石の」(nānāratna)の部分については諸写本の間に混乱が認められ、チベット訳には相当訳文がない。ただし、方広には「種種花鬘珍寶繪綵」との訳文が見られる。

¹⁵⁰「繪綵」とは「絹の綵紐（あやひも）」のこと。

¹⁵¹『下巻』には「この世間に出現せる〔御身の〕塔廟は」と訳したが、「〔御身は〕この世間に出現したる塔廟として」に訂正する。

¹⁵²vicarasiを、『下巻』には「遍歴する」と訳したが、「遊行したまえり」に訂正する。

温順にして静穏なる意識，制御されたる感官，寂靜なる心を有したまう。

教師〔たる御身〕は，教化せらるべき人天の衆に教示したまう。

シャーキヤ族の尊者，人中の牡牛，人天の応供¹⁵³〔たる御身〕を礼拝せん。

35. 正智あり，至上なる妙智の語言を具有して¹⁵⁴，三界〔の衆生〕を覚知せしめ，

三垢穢を除滅しては，三明と三解脱とを説示したまう。

牟尼よ，〔御身は，衆生の〕理解力に応じて教化の適否を識別す。

三千〔世界〕において奇特なりて，人天に尊崇されたる¹⁵⁵御身を礼拝せん。

かくの如く，実に比丘らよ，スニルミタ天子は，眷属衆と共に如来を讚歎せるのち，合掌して如来を敬礼しつつ，一方に立てり。

それからまた，サントウシタ¹⁵⁶（兜率）天子は，兜率天に属する天神¹⁵⁷たちと共に，如来のもとに近づき来たりて，広大なる天衣の網を以て菩提の座に坐せる如来を覆い，面前にて，かくの如き偈を以て讚歎せり。

36. 御身が兜率天宮に住したまえる時，そこにおいて，

御身によって説かれたる，かの高大なる法，

かの教誡は断滅することなく，

今日においてもなお，天子たちは法を行じたり。

37. 〔御身を¹⁵⁸〕見ることに〔我らは〕厭足を生じることなく，

〔御身の〕法を聴くことにも厭足を感じることなし。

功德の海たる者よ，世間の灯明たる者よ，

〔我らは〕御身に対し，頭面をつけ，真心を以て敬礼せん。

38. 御身が兜率天より下生したる，かの時に，

御身は一切の無暇處を空閑ならしめたり¹⁵⁹。

菩提樹下に坐したまえる時には，

あらゆる衆生の煩惱を鎮静せしめたり。

39. そのために〔御身が〕高大なる菩提を尋求し，

また，マアラを降伏して〔菩提を〕獲得したる，

御身の，かの誓願は成就したるが故に，

速やかに，高大なる〔法〕輪を転じたまえ。

40. 法を愛樂¹⁶⁰する，幾千もの多くの生類が，

「いざ法を聴かん」と待ち設けたり。

¹⁵³ mahita は「尊崇された」の意であるが，文脈を勘案して「応供」と訳した。「応供」とは「供養されるに値する」の意である。

¹⁵⁴ 「下巻」には「至上の智と宣説とを具有し」と訳したが，文脈を勘案して「至上なる妙智の語言を具有して」に訂正する。

¹⁵⁵ 「下巻」には mahita を「供養せられる」と訳したが，「尊崇されたる」に訂正する。

¹⁵⁶ samtuṣita は「兜率天王」の名として用いられる。

¹⁵⁷ 「天神」(deva) は，チベット訳には「天子」(lhaḥi bu) と訳されており，梵文と合わない。

¹⁵⁸ チベット訳には「御身を」に当たる訳語 (khyod la) がある。

¹⁵⁹ 「空閑ならしめたり」(śoṣita) はチベット訳には「浄化せり」(sbyaṅs [= viśodhita]) と訳されており，梵文と合わない。

¹⁶⁰ 「愛樂」とは「喜んで願うこと」である。

高大なる〔法〕輪を速やかに転じたまえ。
幾千もの生類を有（迷界）より解脱せしめたまえ。

かくの如く、実に比丘らよ、サントウシタ天子は、眷属衆と共に如来を讃歎せるのち、合掌して
264 如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

それからまた、スヤーマ¹⁶¹（夜摩）天子を初めとする夜摩天の天神たちは、如来のもとに近づき
来たりて、種々の花・香料・花環・塗油を以て、菩提の座に坐せる如来を供養なせるのち、面前に
て、かくの如き適切なる偈を以て讃歎せり。

41. 持戒と三昧、また、智慧において、
御身に等しき者あらず、況して勝りたる者をや。
信解と解脱とに熟達せる如来たる、
御身を、頭面をつけて礼拝せん。
42. 菩提道場に、諸天神によって造作せられたるところの、
この浄妙なる莊嚴が顕現したり。
御身が天神や人間に供養せられたるが如き、
かくの如き〔供養〕に相応しき、誰か他の者のあるべきもなし。
43. 御身の出現は無益なるものにあらずして、
そのために、多くの難行が修習せられたり。
甚だ邪悪なる者（マーラ）を眷属もろともに征圧して、
御身は無上なる菩提を證得したまえり。
44. 十方〔の諸国土〕に光輝あらしめて、
智慧の燈明により三界を照らしたまえり。
266 〔御身は¹⁶²〕暗黒を滅除したまいて、
衆生に最高の眼を与えたまわん。
45. 御身〔の功德〕を讃歎して、幾劫〔の間〕語り続けようとも、
御身の毛孔〔ほどの功德〕ですら、〔語り〕尽くすこと能わず。¹⁶³
功德の海なる者よ、世間に名声高き者よ、
如来たる御身を〔我らは〕頭面をつけて礼拝せん。

かくの如く、実に、かのスヤーマ天子を初めとする〔夜摩天の¹⁶⁴〕天神¹⁶⁵たちは、如来を讃歎せ
るのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

それからまた、天主帝釈¹⁶⁶は、三十三天（忉利天）の天神たちと共に、種々の¹⁶⁷花・香料・花環・

¹⁶¹ suyāma は「夜摩天王」の名として用いられる。

¹⁶² チベット訳には「御身は」に当たる訳語 (khyod ni) がある。

¹⁶³ この一行は、方広には「一毛孔功德 猶尚不能盡」と訳されている。

¹⁶⁴ チベット訳には「夜摩天の」に相当する訳語 (ḥthab bral gyi) がある。

¹⁶⁵ 「天神」(deva) は、チベット訳には「天子」(lhaḥi bu) と訳されており、梵文と合わない。

¹⁶⁶ 仏典では、インドラ神は「三十三天の王」として「天主帝釈」(śakro devānām-indraḥ) と呼ばれる。

¹⁶⁷ チベット訳には「種々の」(nānā) に当たる訳語はない。

塗油・香末・衣¹⁶⁸・傘蓋・旗幟・幢幡の莊嚴を以て如来を供養なせるのち、かくの如き偈を以て讚歎せり。

46. 牟尼よ、〔御身は〕動揺せず、罪過なく、常に安定することメール山の如く、
十方に名声が鳴り響き、智慧光あり、福德と威光とを具足したまえり。
牟尼よ、御身は、往昔、幾百もの仏陀を篤く供養したり。
その勝因¹⁶⁹によるが故に、菩提樹下にてマーラの軍勢を降伏したまえり。

47. 持戒・多聞・三昧・智慧の蔵にして、正智の旗幟なる者よ、
老・死を破摧する医王にして、世間に眼を与える者よ。
三垢と忿恨とを捨棄し、感官を鎮め、心意を寂靜ならしめたる牟尼よ。
御身に帰命したてまつる。釈迦族の牡牛にして、衆生の法王なる者よ。

48. 〔御身は〕精進の力勢を以て卓出せる、無数に等しき菩提行を生じたり。
〔故に〕智慧の力、方便と慈の力、梵天の〔如き〕福德の力¹⁷⁰、それらの力は、
世尊よ、〔御身が〕菩提に発趣せる¹⁷¹時に〔すでに〕無量に等しかりしも、
力ある者よ、今日さらに、菩提の座に坐して、十力を有する者と成りたまえり。

49. 無数の〔マーラの〕軍勢を見て、全ての天神たちは恐懼し戦慄せり。
〔菩提の座に坐せる沙門の王（菩薩）が、もしや退散するにあらざるや〕と。
〔されど〕御身はそれら〔の魔物たち〕に¹⁷²脅えることも身じろぎすることもなく、
重量あるもの（大地）¹⁷³を手の一撃によって震動せしめて、マーラの軍勢を降伏したまえり。

50. 先人〔たる過去仏〕たちによって、獅子座において無上の菩提が得られたるが如く、
御身の〔菩提の〕證得も〔過去仏と〕平等かつ同一にして、別異あることなし。
意識も同等、心も同等なりて、御身は自ら一切智を獲得したり。
それ故に、御身は世間の最高者、自存者にして、衆生の福田なり。

270 かくの如く、実に比丘らよ、天主帝釈は、三十三天（忉利天）の天子たちと¹⁷⁴共に、如来を讚歎せるのち、如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

それからまた、四大天王たちは、四大天王天に属する天子たちと共に、如来のもとに近づき来たりて、アティムクタカ・チャンパカ・スマナス・ヴァールシカ・ダーヌスカールン¹⁷⁵の花環と蔓とを携えて、百千もの〔多くの〕アプサラス（天女）に圍繞せられ、天界の伎楽を演奏しながら、如来を供養なせるのち、かくの如き適切なる偈を以て讚歎せり。

51. 語音まことに麗しく、音声は優美にして、
月の如く寂靜を顯示し、心意は清涼なり。
顔に微笑を浮かべ、舌は長広なりて、

¹⁶⁸ チベット訳には「香末・衣」(cūrṇa-cīvara) に当たる訳語はない。

¹⁶⁹ 「勝因」(viśeṣa) とは「勝れた特殊性」の意である。

¹⁷⁰ チベット訳には「梵天の」(brāhma) に当たる訳語はないが、方広には「大梵福」と訳されている。

¹⁷¹ 「発趣せる」(samprasthita) とは「〜に向けて出発し進みゆける」の意である。

¹⁷² 「御身はそれらに」は、チベット訳では「御身は魔物たちに」という意味の訳文になっている。

¹⁷³ gurubhāra を『下巻』には「重擔〔を持する大地〕」と訳したが、「重量あるもの（大地）」に訂正する。

¹⁷⁴ 「天子たちと」(devaputrāḥ) はチベット訳には「天神たちと」(lha rnam) になっており、梵文と合わない。

¹⁷⁵ ここに列挙される花名の原語は順次 atimuktaka, campaka, sumanas, vārṣika, dhāruṣkārīn である。

至上の歓喜を与えたまう。牟尼よ、御身を礼拝せん。

52. 一切の世界に、人間や天神たちの、
 美妙にして愛好すべき音声や音響があれども、¹⁷⁶
 御身の優雅なる音色の音が発せられるや、
 談論中の¹⁷⁷全ての音声は覆蔽せられる。
53. [御身の音声は] 貪欲、瞋恚、愚癡、煩惱を鎮め、
 非人（魔物）たちにも清浄なる快樂を生ぜしめる¹⁷⁸。

272

- [魔物たちは] 汚れなき心を以て法を聴き、
 実に、彼らはみな、真聖なる解脱を獲得する。
54. 御身は無知なる者たちを蔑視することなく、
 [己に] 知ありとの慢心にて驕り高ぶることも決してなし。
 御身は倨傲なることなく、また、卑屈なることもなく、
 大海の真ん中に聳え立つ山の如くなり。
55. かくの如き衆生（御身）が世間に生じたるが故に、
 人間たちは、ここに、よく利得を獲得したり。
 パドマー¹⁷⁹（蓮華）なるシュリー（吉祥天女）の如き、
 財宝の施与者たる御身は¹⁸⁰、また、一切世間に法を施与したまわん。

かくの如く、実に【比丘らよ、¹⁸¹】四大天王を初めとする《四¹⁸²》大王天に属する天神たちは、菩提の座に坐せる如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

それから、実に虚空の神々は、如来のもとに來たりて、現等覺¹⁸³を供養するために、天空の全体を宝網と鈴網と宝蓋と宝幢と、宝と絹の綵紐と宝の花環飾と、さまざまの真珠瓔珞や花の環紐を捧持せる半身の天神たちと¹⁸⁴、また、諸の半月宝とを以て莊嚴して、如来に献上せり。[それらを]献上し、また面前にて、かくの如き偈を以て讚歎せり。

- 274 56. 牟尼よ、我らは天空に住するが故に、
 生類の一切の所行をあるがままに明らかに見る。
 清浄なる衆生よ、御身の所行を観察するに、
 御身の一念たりとも迷乱するを見ることなし。

¹⁷⁶ 本偈の上二行のチベット訳は「人間や天神たちの、美妙にして愛好すべき、世界に存在するところの、全ての音響は」という意味の訳文になっている。

¹⁷⁷ 「談論中の」(bhāṣamāṇām) のチベット訳は「人間の」(mi yi) となっており、梵文と合わない。

¹⁷⁸ 『下巻』には「非人（魔物）の快樂を清浄なるものとならしめる」と訳したが、誤訳と思われるので、「非人（魔物）たちにも清浄なる快樂を生ぜしめる」に訂正する。

¹⁷⁹ padmā は padma（蓮華）の女性形であり、śrī（吉祥天女）の別称とされる。

¹⁸⁰ チベット訳には「御身は」(bhava) に当たる訳語はない。

¹⁸¹ 「比丘らよ」(bhikṣavaḥ) は、殆どの写本に省略されているが、これを挿入している写本もある。

¹⁸² 「四」(cātur) は全写本に欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても、これを挿入すべきである。

¹⁸³ 「現等覺」(abhisambodhi) とは「ものがあるがままに、そのまま見るさとり。正しくて完全なさとり」であり、「そのような無上のさとりを得た仏陀」を意味する。中村元『佛教語大辞典』339頁参照。

¹⁸⁴ 「花の環紐を捧持せる半身の天神たち」との部分は、チベット訳には「花の環紐を、半身を現出せる天神たちに捧持せしめ」という意味の訳文になっている。

57. [御身を] 供養するために来集せる菩薩たち、
 彼ら、人類の導師たちが天空に遍満せり。
 されど、実に、彼らは虚空を自体となせるが故に、
 諸の宮殿を損壊することなし。
58. 空中より花の雨が降りしきり、
 大千[世界]は[花で]満杯となるべし。
 それらは、ことごとく、御身の身体に降り来たれるも、
 諸の川が大海に流入するが如く[満杯にならざる]なり。
59. 我らは、傘蓋と花環飾と、
 首飾りとチャンパカ花の綵紐と、
 珠纒¹⁸⁵と、月と、また、半月とを見る。
 天神たちが[それらを]投下すれども、混合することなし¹⁸⁶。
60. 天空の全体に天神たちが遍満し、
 ここ(天空中)には、毛髪の入る隙間もなし。
 [天神たちが]二足(人間)の最勝者(御身)に供養をなせるも、
 御身には傲慢も驚駭も生じることなし。
- 276
- かくの如く、実に虚空の神々は、菩提の座に坐せる如来を讚歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に立てり。
- それから、実に大地の神々は、如来を供養するために、地面の全体を掃き清め洗浄して、香水を灌ぎ、また、花を撒布し、種々の更紗の天蓋を広げて、如来に献納なせるのち、かくの如き偈を以て讚歎せり。
61. 三千[世界]は金剛の如く破壊されざる堅固なものと成り¹⁸⁷、
 金剛の[如く堅い決意の]語句を以て、この方は菩提の座に坐せり。
 「ここにて、われの皮膚と肉、骨の髄まで枯渴しようとも、
 われは、菩提を得ずしては、ここより立たず」[と]。
62. 人中の獅子たる者よ、御身がもし神通力を加えざれば、
 この¹⁸⁸三千[世界]の全体は、余すところなく破裂すべし。
 かくの如き大興奮を以て、諸の菩薩が来集し、
 彼らの足裏[の圧力]によって、拘胝もの国土が震動するが故に。¹⁸⁹
- 278 63. 今、大地の神々に高大なる利得がよく得られたり。
 最勝なる衆生が[その]大地を経行するが故に。

¹⁸⁵「珠纒」(hāra)とは「真珠でかざった、冠の紐」である。『新漢語林』(大修館書店)「珠」参照。

¹⁸⁶「混合することなし」(na saṃskaroti)は、方広には「無雜亂」と漢訳されている。

¹⁸⁷『中巻』には「金剛の如く堅固に安立し」と訳したが、分かりにくいので、チベット訳に従って「金剛の如く破壊されざる堅固なものと成り」に訂正する。

¹⁸⁸チベット訳には「この」(iyam)に当たる訳語はない。

¹⁸⁹本偈全体のチベット訳は「人中の獅子たる者よ、もし御身が、三千[世界]の全体に神通力を加えざれば、足の裏[の圧力]にて震動せる拘胝もの国土は、かくの如く興奮して諸の菩薩が来集せる時、余すところなく破裂すべし」という意味の訳文になっている。

- 世間に存在する全ての塵埃^{じんあい}が御身^{みよしん}により明浄^{みよじやう}ならしめられて、
 三千 [世界] が塔廟^{とうびやう}と化したれば、御身の身体 [が塔廟たる] は言うに及ばず。
64. 百千もの [多量の] 地下^{すいじゆ}の水聚^{すいじゆ}のあらん限りを、
 また、地上^{かて}における生類^{かて}の糧^{かて}の何であれ、
 三千 [世界] の大地の全てを我らは保有せり。
 御身に一切を捧げまつらん。御身の¹⁹⁰欲するがままにこれらを¹⁹¹享受されたし。
65. そこ（大地）にて御身が坐し、あるいは経行^{きやうぎやう}し、あるいは睡臥^{すいが}することの、
 また、善逝^{ぜんぜい}の子にしてガウタマ^{しやうもん}の声聞¹⁹²（弟子）たる者たちが、
 法の教えを説き、あるいはまた、それらを聴くことの、
 [それらによる] 全ての善根^{ぜんこん}を我らは菩提^{えこう}に廻向せん。

かくの如く、実に大地の神々は、菩提の座に坐せる如来を讃歎せるのち、合掌して如来を敬礼しつつ、一方に立てり。

[以上]「讃歎品」と名づける第23章なり。

¹⁹⁰チベット訳には「御身の」(tvam) に当たる訳語はない。

¹⁹¹チベット訳には「これらを」(imāms) に当たる訳語はない。

¹⁹²「声聞」(śrāvaka) は、大乘仏教の三乗思想では「自己のさとりだけを求める出家者」として「独覚」とともに「小乗」として軽視されるようになるが、元來は「出家でも在家でも、教えを聞く人の意味であり、仏弟子を意味した」(『佛教語大辞典』734頁参照)。